【研究論文】

児童が意欲的に取り組むことのできる書写授業
―書写の授業と意識の関係から―

米山　幸恵

1. はじめに

学校教育では子どもたち自身が意欲を持ち，主体的に取り組むことが重要視されている。先行研究によると,「どのような時にやる気がでますか。」という問いに対して,「理解できた時」「テストがよかった時」に続いて「好きな教科・とくいな教科の時」が上位に入った[i]。子どもたちは，好きな教科では意欲的に取り組むことができるようである。

では,子どもたちはどの教科が好きなのか。ある学習意欲調査によると，書写，外国語，総合，道徳，学活は好きな教科として選ばれた割合が低くなっている[ii]。中でも書写は国語科の一部であるにもかかわらず，国語科に比べて割合が低い。書写で扱う「文字を書くこと」はすべての教科に関わることであり，その書写があまり好かれていないことには問題があると考える。

2.　研究の目的と方法

2.1 問題の所在と研究の目的

仙台北中山小学校で平成 22 年 4 月に実施された調査から，学年が上がるにつれて，自分の字をうまいと思っている児童，書写が好きな児童が少なくなっていることがわかった[iii]。さらに，高学年では書写の授業を楽しいと感じている子どもが少ない。書写が楽しくない主な理由としては「字が苦手」「字が下手」「書くことが好きでない」「字ばっかり書いているから」というものが挙げられていた。

長野市立裾花小学校の平成 10 年の調査によると，書写の授業が好きな児童はおおよそ学年が上がるにつれ減り，6 年生ではわずか 20%であった

iv。また，「②毛筆で書くことはすきですか」という質問に対する分析結果について「好き・嫌いの理由を詳細に調べてみると，概ね3年生から6年生の各学年とも上手に書けるという子は毛筆で字を書くことが好きであると答えている。」「上手に書けないという子，面倒がる子，汚れを気にする子は嫌いと答えている。」と述べられていた。

以上の調査の結果から，書写の授業が高学年の児童を中心にあまり好かれていないこと，自分の字に対する意識と，書写の授業に対する意識には関係がありそうなことがわかった。ただし，上記の調査ではそれぞれの項目の結果のみが示されており，項目相互の関係性については一部の自由回答記述を取り上げて述べるに留まっているため，両者の関係性について統計的に明らかになっていない。書写の授業に対する意識と自分の字に対する意識の関係性を統計的に明らかにすることができれば書写の授業に意欲的に取り組むことができるようにするための手掛かりになるのではないか。そこで，本研究では書写の授業に対する意識と自分の字に対する意識の関係性に重点を置き，統計的に検証する。そのために次の仮説を立てた。

『書写の授業に対する意識と自分の字に対する意識には関係がある。』

本研究では，書写の授業に対する意識，自分の字に対する意識を明らかにし，統計的にこの仮説を検証し，関係性の有無を明らかにすることを目的とする。また，他にも書写の授業と関係がある意識や経験がないかについても調べていく。

2.2 研究方法

書写の授業に対する意識と関係する意識を明らかにするために，アンケート調査を行うことにした。調査は以下の方法で行った。

・調査方法

アンケート調査とし，調査票に書かれた質問項目を調査対象者自身が回答する自記式で行う。

・調査対象者の選定

母集団を全国の中学生とする。現在，書写を学んでいる小学生よりも，小学校での書写を学び終えたばかりの中学生の方が客観的に自身の気持ちを振り返って回答することができると考えたためである。有意抽出による調査対象の選択を行い，長野県内6校の中学校の生徒992人に依頼

した。

・調査票の配布回収方法

集合調査法とする。各校，各クラスの担当の教員に依頼し，アンケートを配布し，回答者はその場で回答する。アンケート実施日の欠席者については，今回の調査から除外した。

3. 調査

3.1 調査用紙の作成

予備調査1として，信州大学言語教育専攻国語分野の学生9名にアンケート調査を行った。そのアンケートと先行研究による意識調査の結果を元に，予備調査2を行った。予備調査2は「初等国語科指導基礎法D」（平成23年度後期開講，担当：八木雄一郎講師）の受講学生に回答を依頼した。

予備調査2の結果をもとに，質問数を中学生でも答えやすい量にするために精選することにした。因子分析を行い，他の項目と関わりが少ないものを本調査では除外した。

その結果，調査項目は以下の通りとなった。

設問1　あなた自身の経験についてお聞きします。あなたにもっとも近いところに○を付けてください。

1-1　小学生のころ，書道教室・お習字などの習い事に通っていましたか。

1-2　小学生のころ，書道のコンクールや，学校の書写の作品で賞をとったことがありますか。

1-3　小学生のころ，祖父母が何か文字を書いているところを見たことがありますか。

1-4　小学生のころ，兄・姉が何か文字を書いているところを見たことがありますか。

1-5　小学生のころ，弟・妹が何か文字を書いているところを見たことがありますか。

1-6　小学生のころ，パソコンを使ってメールを送ることがありましたか。

1-7　小学生のころ，パソコンを使って文章を書くことがありましたか。

1-8　小学生のころ，携帯電話を使ってメールを送ることがありましたか。

1-9　小学生のころ，友だちから硬筆（鉛筆，シャープペン，ペンなど。毛筆以外の筆記用具のこと。）の字をほめられたことがありますか。

1-10　小学生のころ，友だちから毛筆の字をほめられたことがありますか。

1-11　小学生のころ，先生から硬筆の字をほめられたことがありますか。

1-12　小学生のころ，先生から毛筆の字をほめられたことがありますか。

1-13　小学生のころ，友だちの書いた硬筆の字をうまいと思ったことがありますか。

1-14　小学生のころ，友だちの書いた毛筆の字をうまいと思ったことがありますか。

1-15　小学生のころ，手書きで書かれた文字を見て，「こんなふうに書きたい」と思ったことがありますか。

設問 2　小学生のころのあなた自身の気持ちや習慣についてお聞きします。あなたにもっとも近いところに○を付けてください。

2-1　小学生のころ，毛筆で字を書くことが好きだった。

2-2　小学生のころ，作文を書くことが好きだった。

2-3　小学生のころ，予定が入ったとき，カレンダーや手帳などに記しておくようにしていた。

2-4　小学生のころ，楽器を演奏することが好きだった。

2-5　小学生のころ，硬筆（鉛筆，シャープペン，ペンなど。毛筆以外の筆記用具のこと。）を使った書写の授業が好きだった。

2-6　小学生のころ，人から話を聞いたときはメモをとるようにしていた。

2-7　小学生のころ，硬筆で字を書くことが好きだった。

2-8　小学生のころ，日記を書くことが好きだった。

2-9　小学生のころ，毛筆で書いた自分の字が好きだった。

2-10　小学生のころ，人前で話をするときは，話す内容を紙に書いてから話すようにしていた。

2-11　小学生のころ，絵を描くことが好きだった。

2-12　小学生のころ，文字を手書きすることは大切だと思っていた。

2-13　小学生のころ，ポスターなどの掲示物を作ることが好きだった。

2-14　大人になって書写の授業がなくなっても，「毛筆を使って字を書きたい」と小学生のころ思っていた。

2-15　小学生のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった。

2-16　小学生のころ，手紙を出すとき，宛名（あてな）は手書きするようにしていた。

2-17　小学生のころ，書き初めをすることが好きだった。

2-18　小学生のころ，工作など，物を作ることが好きだった。

2-19　小学生のころ，気になる情報を見たときはノートなどに記録しておくようにしていた。

2-20　小学生のころ，硬筆で書いた自分の字が好きだった。

2-21　小学生のころ，大人になって，パソコンや携帯電話などがより身近なものになっても，手書きで文字を書くことは大切にしたいと思っていた。

2-22　小学生のころ，授業で，ノートをとるのが好きだった。

3.2　本調査

以上のように作成した調査用紙を用い，本調査を行った。実施方法については「2.2　調査方法」で述べたとおりである。912 人からの回答が得られ，内，未回答の項目があった 35 人分を調査から除外し，877 人分について分析を行うことにした。このとき，あてはまる・よくあった等の回答を 5，あてはまらない・なかった等の回答を 1 として数字に置き換えて入力した。

3.3　調査結果

3.3.1　毛筆・硬筆に対する学習者の意識

まず，毛筆，硬筆ついて尋ねた項目について，子どもたちがどのような意識を持っているかを確認した。この結果に対してカイ二乗検定を用い，統計上分布に偏りがあるかを調べた[v]。その結果を下に記す。

・2-1　小学生のころ，毛筆を使って字を書くことが好きだった。

	1	2	3	4	5	総計
データの個数 / 1 毛筆で字を書く	245	226	195	133	78	877

$X^2(4)= 108.741$　，　$p<.01$

・2-9 小学生のころ，毛筆で書いた自分の字が好きだった。

	1	2	3	4	5	総計
データの個数 / 9 毛筆自分の字	424	198	185	55	15	877

$X^2(4)= 585.115$　，　$p<.01$

・2-15 小学生のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった

	1	2	3	4	5	総計
データの個数 / 15 毛筆書写授業	357	187	166	91	76	877

$X^2(4)= 286.233$　，　$p<.01$

・2-5 小学生のころ，硬筆を使った書写の授業が好きだった。

	1	2	3	4	5	総計
データの個数 / 5 硬筆書写授業	268	164	250	122	73	877

$X^2(4)= 157.396$, $p<.01$

・2-7 小学生のころ，硬筆で字を書くことが好きだった。

	1	2	3	4	5	総計
データの個数 / 7 硬筆で字書く	199	159	253	163	103	877

$X^2(4)= 69.802$, $p<.01$

・2-20 小学生のころ，硬筆で書いた自分の字が好きだった。

	1	2	3	4	5	総計
データの個数 / 20 硬筆自分の字	393	193	208	58	25	877

$X^2(4)= 478.580$, $p<.01$

どの項目でも，1%水準で分布に偏りがあることが認められた[vi]。毛筆，硬筆ともに，書写の授業，自分の字，文字を書くことに対して，好意を持てずにいる人数が統計的に多いことがわかった。

3.3.2 項目間の相関

書写の授業，自分の字，文字を書くことに対して好意を持っている子どもはどのような経験や意識があるのか，逆に好意を持てずにいる子どもはどうなのかについて調べていくために，すべての項目同士の相関係数を，分析ツールを用いて求めた[vii]。N＝877 の場合，｜r｜＞.0666 ならば 5%水準で有意である。結果は資料 2 に示した。多くの項目間で有意な数字を得ることができた。このとき相関係数については岩淵千明（1997）『あなたもできるデータの処理と解析』を参考にし，±.40~±.70 をかなり（比較的強い）相関がある，±.70~±1.00 を高い（強い）相関があるとした[viii]。この相関係数を元に，項目間の関係性について検証していく。以下，数値については小数点以下第 4 位を四捨五入し，3 位までを示すこととする。

3.3.3 仮説の検証

本研究の仮説『書写の授業に対する意識と自分の字に対する意識には関係がある。』について検証を行う。

この仮説について検証するために，毛筆について，「2-15 小学生のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった」「2-9 小学生のころ，毛筆で書いた自分の字が好きだった」の相関係数を調べたところ，r =.584 であり，比較的強い相関があることがわかった。

また，関係性について一つの要因の違いに着目し，その平均に差があるかどうかを調べるために一元配置の分散分析を行った。なお，分散分析を行う上で，数値化した回答の 1，2 を群 1（非好意的群・経験少群），3 と答えた回答を群 2（どちらでもない群），4・5 と答えた回答を群 3（好意的群・経験多群）とした。以下分散分析を行う際もこのように群に分けて行うこととする。

このときの帰無仮説は「自分の毛筆の字に対する意識に関わらず，毛筆での書写の授業に対する意識は同じである」となる[ix]。分散分析の結果，F (2, 874) = 177.421　P=.000 であった。よって，5%水準で統計的に有意であった。そのため，帰無仮説は棄却され，自分の毛筆の字に対する意識によって，毛筆での書写の授業に対する意識に差があることがわかった。よって，自分の毛筆の字に対する意識と毛筆での書写の授業に対する意識の間には関係性があると言える。

また，硬筆についても検証するために，「2-5 小学生のころ，硬筆を使った書写の授業が好きだった」と「2-20 小学生のころ，硬筆で書いた自分の字が好きだった」の相関係数を調べたところ，r =.408 であった。帰無仮説を「自分の硬筆の字に対する意識に関わらず，硬筆での書写の授業に対する意識は同じである」とし，分散分析を行った結果，F (2, 874) = 66.470 P =.000 であった。よって，5%水準で統計的に有意であった。そのため，帰無仮説は棄却され，自分の硬筆の字に対する意識によって，硬筆の書写の授業に対する意識に差があることがわかった。よって，自分の硬筆の字に対する意識と硬筆の書写の授業に対する意識の間には関係があると言える。

このことから，毛筆，硬筆ともに，自分の字に対する意識と書写の授業に対する意識の間には関係があることがわかった。このときの因果関係と

して，①「自分の字が好きだから書写の授業が好きである」「自分の字が嫌いだから書写の授業が嫌いである」②「書写の授業が好きだから自分の字が好きである」「書写の授業が嫌いだから自分の字が嫌いである」の 2 種類の可能性が考えられる。

3.3.4 毛筆の書写授業と関係性の強い意識と経験

次に，どのような意識や経験が書写の授業に対する意識と関係しているかについて調べていく。まず，毛筆の書写授業に対する意識と関係が強い意識は何かを調べる。「2-15 小学生のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった」と.70 以上の強い相関がある項目は，「2-1 毛筆で字を書くことが好きだった」，「2-17 小学生のころ，書き初めをすることが好きだった」の 2 項目であった。この 2 項目について，分散分析を行った。

まず，「2-1 毛筆で字を書くことが好きだった」と「2-15 小学生のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった」で分散分析を行った。帰無仮説は「毛筆で字を書くことに対する意識に関わらず，毛筆での書写の授業に対する意識は同じである」となる。結果，F (2, 874) = 472.529　P =.000 であり，5%水準で有意である。そのため帰無仮説は棄却され，毛筆で字を書くことに対する意識によって，毛筆での書写の授業に対する意識には差があることがわかった。

さらに，「2-15 小学生のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった」と「2-17 小学生のころ，書き初めをすることが好きだった」で分散分析を行った。帰無仮説は「書き初めに対する意識に関わらず，毛筆での書写の授業に対する意識は同じである」となる。結果，F (2, 874) = 367.870　P =.000 であり，5%水準で有意である。そのため帰無仮説は棄却され，書き初めに対する意識によって，書写の授業に対する意識には差があることがわかった。

以上のことから，毛筆で字を書くことや書き初めと書写の授業に対する意識の間には関係があることがわかった。このとき，因果関係としては①「毛筆で字を書くことや書き初めが好きではないから毛筆を使った書写の授業が好きではない」と②「書写の授業が好きではないから，毛筆で字を書くことや書き初めが好きではない」ということが考えられる。

また，設問 1 との間で相関が高いものについても調べた。「2-15 小学生

のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった」と.40 以上の比較的強い相関があった設問１の項目は「1-2 小学生のころ，書道のコンクールや，学校の書写の作品で賞をとったことがありますか」「1-10 小学生のころ，友だちから毛筆の字をほめられたことがあますか」「1-11 小学生のころ，先生から毛筆の字をほめられたことがありますか」の３項目であった。それぞれについて分散分析を行った。

まず，「1-2 小学生のころ，書道のコンクールや，学校の書写の作品で賞をとったことがありますか」と「2-15 小学生のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった」について分散分析を行った。この場合のみ，入賞経験なしを群 1，入賞経験 1 回以上 5 回未満を群 2，入賞経験 5 回以上を群 3 としてグループ分けをした。帰無仮説は「書道のコンクールでの入賞経験に関わらず，毛筆での書写の授業に対する意識は同じである」となる。結果，F (2, 874) = 90.288　P =.000 であり，5%水準で有意である。そのため帰無仮説は棄却され，コンクールでの入賞経験の有無によって，書写の授業に対する意識には差があることがわかった。

次に，「1-10 小学生のころ，友だちから毛筆の字をほめられたことがあますか」と「2-15 小学生のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった」について分散分析を行った。帰無仮説は「友だちから毛筆の字をほめられた経験に関わらず，毛筆での書写の授業に対する意識は同じである」となる。結果，F (2, 874) = 138.872　P =.000 であり，5%水準で有意である。そのため帰無仮説は棄却され，友だちに毛筆の字をほめられた経験の有無によって，書写の授業に対する意識には差があることがわかった。

さらに，「1-11 小学生のころ，先生から毛筆の字をほめられたことがありますか」と「2-15 小学生のころ，毛筆を使った書写の授業が好きだった」について分散分析を行った。帰無仮説は「先生から毛筆の字をほめられた経験に関わらず，毛筆での書写の授業に対する意識は同じである」となる。結果，F (2, 874) = 104.892　P =.000 であり，5%水準で有意である。そのため帰無仮説は棄却され，先生に毛筆の字をほめられた経験の有無によって，書写の授業に対する意識には差があることがわかった。

以上のことから，コンクールで入賞する，教師や友だちからほめられるといった自分の書いた字について他者から認められた経験がある子どもは書写の授業が好きだと思っていることが多いことがわかった。この場合の

因果関係としては①「認められたから書写の授業が好きになったと②「書写の授業が好きで，頑張っていたから認められた」という場合が挙げられる。

3.3.5 硬筆の書写授業と関係性の強い意識

硬筆での書写の授業について考察するため，「2-5 小学生のころ，硬筆を使った書写の授業が好きだった」との相関が高い項目について調べていく。相関係数が.70 以上の高い相関がある項目は見られない。.40 以上の比較的強い相関がある項目について見ていくと，その多くは，硬筆，毛筆に関わる内容のものであったが，中には「2-8 小学生のころ，日記を書くことが好きだった」「2-22 小学生のころ，授業で，ノートをとることが好きだった」という日常的に行われる書字活動についての項目もあった。この 2 項目について調べていくこととする。

まず，「2-8 小学生のころ，日記を書くことが好きだった」と「2-5 小学生のころ，硬筆を使った書写の授業が好きだった」で分散分析を行った。帰無仮説は「日記を書くことに対する意識に関わらず，硬筆での書写の授業に対する意識は同じである」となる。結果，F (2, 874) = 67.767 P =.000 であり，5%水準で有意である。そのため帰無仮説は棄却され，書き初めにする意識によって，書写の授業に対する意識には差があることがわかった。

次に，「2-22 小学生のころ，授業で，ノートをとることが好きだった」と 2-5 小学生のころ，硬筆を使った書写の授業が好きだった」で分散分析を行った。帰無仮説は「ノートをとることに対する意識に関わらず，硬筆での書写の授業に対する意識は同じである」となる。結果，F (2, 874) = 89.165 P=.000 であり，5%水準で有意である。そのため帰無仮説は棄却され，ノートをとることに対する意識によって，書写の授業に対する意識には差があることがわかった。

これらの結果から，硬筆の書写に対する意識と，日記を書く，ノートをとることに対する意識の間には関係があるといえる。書写の授業が，文字を書くことのみではなく，日記を書く，ノートをとるといった日常的に行われる自分自身で文章を考えて書く活動と関係していたことが興味深い。ここでの因果関係としては①「日記やノートをとることが好きだから書写

の授業が好き」と②「書写の授業が好きだから日記やノートをとることが好き」の２つが考えられる。

4. 今後の課題

本研究では２項目間の関係性があると述べるにとどまってしまった。自分の字が好きだから書写の授業が好きなのか，書写の授業が好きだから自分の字が好きなのかといった，どちらが原因となっているのかまで調べることができなかったことは非常に心残りである。どちらが原因となっているかを調べ，その原因に対して子どもたちが意欲的に授業に取り組めるようにするためにはどのようにしたら良いのか，具体的な方法を考えていくことが今後の課題である。

【注】

i 八千代市教育センター（2004）「子どもの学習意欲―学ぶ姿勢を高める―」(『平成17年度調査報告書』№31，八千代市教育委員会，http://www.yachiyo.ed.jp/yachiyo/shiryo/kenkyu/31.pdf)

ii にかほ市立上郷小学校（2010）「平成22年度小学校まなび・ふれあい充実授業研究成果報告書」http://www.akita-c.ed.jp/e-sidou/h22seika/pdf/h22kamigousyo.pdf

iii 仙台市立北中山小学校（2010）『書写についての意識調査』http://www.sendai-c.ed.jp/~kitanaka/

iv 長野市立裾花小学校（1998）『第39回全日本書写書道教育研究会　第36回長野県書写書道教育研究会　長野大会資料　「書写の学習指導」』pp.3-5

v カイ二乗検定　本来，1000人の調査で選択肢が５つであれば，200人ずつになる。しかし何らかの理由によって，回答には偏りが生まれる。その偏りが偶然と呼べる程度のものなのか，統計的に有意なものなのかを調べる検定。

vi 有意水準1%　実際には偶然に過ぎないのに，誤って「意味がある」と判断している可能性が多くて1%であるという意味。

vii 相関分析・相関係数　回答の類似性について調べる分析。２つの項目で似通った回答が多いほど，　数値は１に近くなる。反対に，真逆の回答が多いと数値は－１に近づく。回答に類似性が薄い場合，数値は０に近づく。

viii 岩淵千明（1997）『あなたもできるデータの処理と解析』福村出版株式会社

ix 帰無仮説　「○○と○○には差がない」という，正しくないとして否定・棄却されることを期待されている仮説。

【参考文献】

・安藤明之（2009）『初めてでもできる社会調査・アンケート調査とデータ解析』日本評論社

・内田治（2002)『すぐわかるEXCELによるアンケート調査・集計・解析　[第2版]』東京図書
・内田治・醍醐朝美（2001)『実践アンケート調査入門』日本経済新聞社
・加藤千恵子・石村貞夫（2003)『Excelでやさしく学ぶアンケート処理』東京図書
・倉澤栄吉（1949)「國語單元學習と評價法」(『倉澤栄吉国語教育全集1　国語単元学習の開拓』,角川書店,pp.177-341)
・倉澤栄吉（1949)「国語と単元学習」(『同上』,同上,pp.345-358,)
・鈴木慶子，林朋美，浜本純逸（2007)「書字習慣に関する調査研究（1）―中学生の場合―」(『書写書道教育研究』第22号，全国大学書写書道教育学会，pp.39-50)
・仙台市立北中山小学校（2010)『書写についての意識調査』http://www.sendai-c.ed.jp/~kitanaka/
・全国大学書写書道教育学会　創立20周年記念事業委員会（2005)『書写書道教育研究第20号（別冊）創立20周年記念学会の歩みとこれからの書写書道教育』全国書写書道教育学会
・田中敏（1996)『実践心理データ解析　問題の発想・データ処理・論文の作成』新曜社
・玉澤友基・湯澤比呂子（1999)「書写に対する意識と書写教育の課題--「二類書写」・「国語科対象書道実習」履修学生のアンケートをもとに--」(『岩手大学教育学部付属教育実践研究指導センター研究紀要』第9号，岩手大学教育学部付属教育実践研究指導センター，pp.93-112)
・長野市立裾花小学校（1998)『第39回全日本書写書道教育研究会　第36回長野県書写書道教育研究会　長野大会資料　「書写の学習指導」』長野市立裾花小学校
・林朝子（2011)「小学校における“書写”のあり方―“書写”に対する学生の意識調査から―」(『三重大学教育学部附属教育実践センター紀要』第31号，三重大学教育学部附属教育実践センター，pp.1-5)
・松尾太加志・中村知靖（2002)『だれも教えてくれなかった因子分析―数式が絶対出てこない因子分析入門―』北大路書房

（よねやま　ゆきえ　御代田町立御代田南小学校）